

# 資料涉獵余話

その55

前回述べた通り昭和十一年十月十七日に飯田の書道講演会を終えた天来は、翌十八日天龍峽に遊んだ。そして、二人の門弟、宮澤秀臣と遠山白雲に伴われて、師の目下部鳴鶴が揮毫した磨崖碑を見学した。写真は、左から宮澤秀臣・中神岳卿・遠山白雲・比田井天来・大森萬里である。

もつとめた。作風は、漢字・仮名ともよくし、特に細字を好んで書いた。遠山白雲(林景一八八四―一九七八)は、旧平岡村の助役や村長を歴任すると共に、三信鉄道の開設にも貢献した。また、農林業の経営や発展にも尽力し、大日本山林会特別会員評議員もつとめた。そのため、地方自治・産業功労者として黄綬褒章や勲五等瑞

宝章を受章した。書は、漢字を比田井天来に、仮名を尾上柴舟に学び、各種展覧会に出展すると共に、日本書院師範・驥山館理事(白雲)孫(白雲息の景政)が三代揃って入選し、大きな話題となったという逸話も残っている。

## 比田井天来の来峽と二人の門人(後)

鎌倉 貞男

る郷土の書家である。教員や神官であった宮澤秀臣(秀一 一八七三―一九六〇)は、大正末期に小学校長を退職して神官となり、地元平岡の神社他の宮司として奉職する傍ら、神職会や神社庁の役員を兼ねた。書は、天来の他に、「近代書壇の父」と称された豊道春海にも学び、各種展覧会に出品して入選・入賞を重ねた。県の書道審査員・日本書道技芸院理事及び審査員等

に、三信鉄道の開設にも貢献した。また、農林業の経営や発展にも尽力し、大日本山林会特別会員評議員もつとめた。そのため、地方自治・産業功労者として黄綬褒章や勲五等瑞

この二人は家も近く、秀臣の長女栄が白雲の妻となっていた。この二人は、前述した師の書のみならず、明治書壇の巨匠中林梧竹をはじめ、巖谷一六・貴名海屋等、古今の大

家の書を所蔵して研鑽を積み、村内外で後進の指導にあたった。こうしたことから、右の二人は地域で「満島(平岡の旧名)の三州の山深い地で、中央筆」と称され、その書は、戦後、天龍村長を思つた、こうしたこと、歴史に於いて、宮澤白城である。ところが今日の飯田下伊那の書道、広くは芸術・文化の振興・発展に少なからず好ましい影響を与えてきたのであるまいか。(故人敬称略)



天龍峽における師弟 (宮澤家蔵)